

Title	片思いの求愛者と拒絶者に対する対人認知 : 仮想場面法による第三者評定
Author(s)	橋本, 剛
Citation	対人社会心理学研究. 2 P.15-P.23
Issue Date	2002
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/11375
DOI	10.18910/11375
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

片思いの求愛者と拒絶者に対する対人認知¹⁾

- 仮想場面法による第三者評定 -

橋本 剛(静岡大学人文学部)

片思い状況の求愛者 / 拒絶者に対する第三者の対人認知、ならびにそれらと恋愛至上主義、片思い状況への親近性の関連を検討した。調査では、はじめに仮想の片思い物語を呈示した上で、物語の拒絶者 / 求愛者に対する対人認知(社会的望ましさ、力本性、個人的親しみやすさ)、恋愛態度、恋愛経験の質問を実施した。大学生 170 名(男性 83 名、女性 87 名、平均 19.71 歳)を分析対象とした。分析の結果、力本性は求愛者が、社会的望ましさは拒絶者が高く評価され、個人的親しみやすさは男性求愛者のみ低く評価された。恋愛至上主義は、求愛者の社会的望ましさとのみ、有意な正の関連を示した。片思い状況への親近性は、個人的親しみやすさで、立場 × 求愛経験 × 拒絶経験の交互作用が有意傾向であり、拒絶 / 求愛どちらの立場も経験している人は、拒絶者 / 求愛者両者を高く評価した。一方、求愛経験はあるが拒絶経験がない人は、拒絶者を高く、求愛者を低く評価した。

キーワード: 片思い、求愛者、拒絶者、対人認知、恋愛至上主義

問題と目的

恋愛関係や友人関係における、対人関係の親密化過程に関する研究(レビューは松井, 1990; 大坊, 1990; 下斗米, 1996 など参照)の多くは、関係がいかにかに形成され、進展し、維持されるかを中心に議論している。また、関係の形成・維持のみならず、関係の崩壊やその釈明に関する研究も、少なからず行われている(e.g., Berscheid & Campbell, 1981; 飛田, 1989; Hill, Rubin, & Peplau, 1976; Sprecher, 1994)。ただし、そこで扱われる対人関係は基本的に、過去・現在・未来いずれかの時点で、当事者双方が親密化志向を持っていることが前提となっている。それに対して、親密化志向が一方向的な対人関係、すなわち「片思い(unrequited love)」状況を扱った研究は、それほど多くない。片思いから関係形成に至るまでの「告白」状況に関しては、その個人内要因(菅原, 2000)や状況要因(栗林, 2000)を検討している試みもあり、それ以降のプロセスについては、従来の親密化研究の知見が適用されよう。しかし、これらの研究では、恋愛関係が形成されなかった場合、すなわち「フラれた / フッタ」場合の、その後の展開までは検討されていない。

しかし、片思いもまた、親密な対人関係を考える上で重要な主題であろう。その第1の理由は、テーマの潜在的なりアリティである。恋愛が人々にとって重要な関心事であることは確かであろうが、恋愛感情が常に恋愛関係の形成・維持と結びつくわけではない。そして、恋愛が重要な関心事であり、かつ恋愛関係を形成していない人も一定数存在するならば、「恋愛関係にない状

況における恋愛感情」もまた、現実的な問題であろう。

第2の理由は、この主題に関する知見や言説の偏りである。たとえば、片思いに関連するテーマである失恋経験研究において、宮下・臼井・内藤(1991)は、青年期前半の失恋経験が、ネガティブで心理的苦痛を伴う側面を持つと同時に、「よい人生経験になった」「今までよりやさしい人間になれた」といった肯定的側面も、もたらし得ることを示している。このように、失恋に関する言説は求愛者(告白者: would-be lovers)の観点に立ったものが多い。ただし、片思い状況には必ず、求愛者のみならず拒絶者(rejectors)も存在する。そして、拒絶者の立場について言及している知見は少ない。このことは研究に限った話ではなく、片思いに関するさまざまな情報(映画やドラマ、音楽など)は、求愛者の視点に立ち、その悲しみを慰め、諦めないことの重要性を説き、上手くいなくてもそれをポジティブに捉えるためのエールを送っているものが多い。一方、拒絶者の感情や観点はあまり描かれず、描かれてもそれはしばしば、断片的かつ不正確である。すなわち、拒絶者は他者の心の痛みに関心なく、心の冷たい非共感的な人間として描かれることも少なくない。

しかし、Baumeister (Baumeister, Wotman, & Stillwell, 1993; Bratslavsky, Baumeister, & Sommer, 1998)は、片思いが求愛者のみならず拒絶者にとっても苦痛な経験であり、拒絶者は罪悪感を感じ、求愛者の侵害的な求愛に悩み、事態終結後にはネガティブな情動しか残らないと主張している。告白を拒絶

することは、人間の基本的な動機である所属欲求 (Baumeister & Leary, 1995) や、恋愛を肯定視する社会的風潮に反することになる、ということからも、拒絶者は難しい立場である。そのような拒絶者の観点を考慮した片思い研究も、拒絶者を過剰な悩みから解放するためには必要であろう。

さらに第3の理由として、片思いは、現代の異性関係に関する諸問題、たとえばセクシャル・ハラスメント、ストーキングや性的強要 (sexual coercion) などと近接するであろうテーマであることが挙げられる。それらの諸問題には、「社会的に許容されない形での片思い」「常軌を逸した片思い」と捉え得るものもあり、当事者の中には実際に、「逸脱行為ではなく単なる片思いだ」と主張するものもある。そして、それらの状況の何が問題で、何を改善すべきかを議論するためには、社会的に許容される範囲を明確にする必然性があり、その判断基準のひとつとして、通常の片思い状況を知る必要がある。つまり、何が「普通じゃない片思い」なのかを明確にするためには、「普通の片思い」を明確にする必要がある。以上から、「片思い」は研究の発展が望まれるテーマであると言える。

さて、Baumeister et al. (1993) では、片思い状況における求愛者 / 拒絶者間の、主観的な経験認識や心理に、少なからず差異が存在することが指摘されている (Table 1)。そして、これらの傾向と性別や人格の関連などは、興味深い問題であろう (Bratslavsky et al., 1998)。ただし、それ以前に、このような求愛者 / 拒絶者の主観的心理は、客観的にはどの程度、妥当と見なされるのだろうか。これらはあくまで主観的認識であるが故に、その社会的妥当性は確認できない。たとえば「待ち伏せ」など、求愛者が正当、拒絶者が不当と見なす求愛行動が、社会的に許容されるかを考えるためには、第三者の視点が必要である。つまり、片思い状況に対する第三者の認知を知ることは、前述の「普通の片思い」を理解するために不可欠であろう。また、第三者認知の在り方は、当事者心理にも影響すると思われる。たとえば、片思い状況に対する第三者認知が、恋愛至上主義的な社会的風潮に則るならば、第三者は求愛者を肯定的に、拒絶者を否定的に見なし、拒絶者の苦悩は理解されにくいものとして一層深刻となるかも知れない。その意味でも、片思い状況に対する第三者認知を理解することは重要であると思われる。

そこで本研究では、片思い状況の求愛者 / 拒絶者に対する第三者認知、ならびにそれらの規定因を検討することを目的とする。具体的には、以下の論点を検討する。

Table 1 片思い状況における求愛者と拒絶者の典型的心理

	求愛者	拒絶者
魅力や態度の互恵性	互恵的だ	互恵的でない
状況に至った理由	そそのかされた誘いがあった	勘違いだ、誘っていない
状況直面時の感情	苦痛	一時的に自尊心向上やがて苦痛
精神的苦痛の主な原因	自尊心の低下	罪悪感
状況の解釈とその後の行動	high risk gamble (成功可能性は0ではない) さらなる求愛	no win situation (受諾できないが拒否も苦痛) 曖昧な拒絶・逃避
求愛行動の意味	唯一の手段	時間の無駄
求愛行動の解釈	常識の範囲内 (愛ゆえであれば多少は大丈夫)	非常識で侵害的
拒絶メッセージの有無	明確に聞いていない	暗黙に伝えた
「沈黙の申し合わせ」*1 の理由	拒絶を聞きたくない	拒絶表示を避けたい
関係拒否メッセージの影響	修復のためにさらに努力	意図が伝わらず絶望
終結後の感情	肯定的 / 否定的両方	否定的情動のみ
相手に対する見方	非一貫的 (誘っていたのに) 謎 (釣り合ってるはずなのに)	自己欺瞞的 (拒絶を直視しない) 非合理的 (やめればいいのに)

Baumeister, Wotman, & Stillwell (1993)、Bratslavsky, Baumeister, & Sommer (1998) より作成

*1 お互いあえて恋愛の話題に触れないこと

片思いにおける対人認知の非対称性の検討 まず、拒絶者と求愛者に対する認知の差異、特に、どちらが肯定的 - 否定的に認知されるのか、を検討する。大まかな仮説としては、恋愛を肯定的に捉える社会的風潮から、求愛者の方が拒絶者よりも肯定的に評価されるのではないだろうか。また、性役割として「男性が告白し、女性がそれを受諾 / 拒否する」パターンの方が主流であろうことを考えると、逆パターン、すなわち「女性が告白して男性が拒絶する」場合は、(性役割に反してまで恋心を打ち明けた情熱的な女性、そしてそんな思いを拒絶する冷たい男性という印象が生じ、) その傾向がさらに強まるかも知れない。

恋愛態度と対人認知の関連 片思い状況における対人認知が、恋愛を肯定視する社会的文脈に影響されるならば、恋愛至上主義 (恋愛を肯定視する傾向) の高い人ほど、求愛者に対して肯定的、拒絶者に対して否定的な印象を持つと考えられる。

片思い状況への親近性と対人認知の関連 片思い状況における対人認知は、評定者自身の恋愛経験、特に求愛者 / 拒絶者経験の有無によって異なる可能性

が考えられる。すなわち、自己肯定視傾向によって、もしくは当事者心理に対するリアルな共感によって、自分が経験したことがある立場を、肯定的に評価するのではないだろうか。

方法

調査は2001年5月、大学2～4年生を対象に、質問紙法により心理学の講義中に集団で実施した。

質問紙ではまず、Bratslavsky et al. (1998)による「典型的な片思い物語」を参考に作成した刺激文を呈示した(資料1参照)。ただし、刺激人物(求愛者/拒絶者)の性別による差異も検討するため、刺激文が「男性求愛者、女性拒絶者」のパターンAと、「女性求愛者、男性拒絶者」のパターンBの2種類の質問紙を作成し、スプリット法を用いた。その後、以下の尺度を実施した。

対人認知尺度 刺激人物に対する対人認知評定として、林(1976)の特性形容詞尺度(20項目、7件法)を用い、拒絶者/求愛者それぞれに対する印象評定を求めた。

恋愛態度尺度 和田(1994)による「恋愛に対する態度尺度」の下位尺度「恋愛至上主義」、「恋愛のパワー」、「理想の恋愛」に該当する26項目(5件法)。これらはいずれも恋愛を肯定視する態度と考えられ、高い相互相関を持つことが確認されている。

恋愛経験に関する質問 堀毛(1994)、和田(1994)を参考に、被験者の現在/過去の恋愛経験について質問した。具体的には現在の恋人の有無、恋人がいない場合は交際したい相手の有無、自分との交際を求めている人の有無などを尋ねた。過去の恋愛経験については、過去5年間に自分が恋愛感情を持った相手の数、自分に対して恋愛感情を持ったであろう相手の数、過去5年の交際相手の人数などを質問した。ただし紙面の都合上、この質問に関する分析は、本論文の最後で若干触れるのみとし、基本的に省略する。

片思い状況への親近性 さらに、片思い状況への親近性として、片思い状況の間接的/直接的経験の有無を尋ねた。すなわち、質問紙の冒頭で提示された刺激文の求愛者(もしくは拒絶者)と似たような経験をした知人の体験談を聞いたことがあるか、そして自分自身が求愛者(もしくは拒絶者)と似たような状況になったことがあるかを質問した。

結果

被験者の属性

回答に不備がある者、年齢が青年期を越えていると思われる者を除外した結果、有効回答者数は170名(男性83名、女性87名)であった。被験者の平均年齢

は19.71歳($SD=1.01$, $Min.=18$, $Max.=24$)である。なお、質問紙パターンによる男女の人数の偏りは有意でなかった($\chi^2(1)=1.125, ns$)。

対人認知尺度の構成

本研究の従属変数となる対人認知の指標を構成するにあたっては、拒絶者に対する認知と、求愛者に対する認知を比較するという研究目的上、それらに共通する指標を構成する必要がある。そこで、あえて拒絶者評定と求愛者評定を区別せず、便宜的に(拒絶者と求愛者ひとりずつ評定している)ひとりの被験者から、2名分の対人認知評定が得られたと仮定して、340名分のデータによる因子分析(主因子法、バリマックス回転; Table 2)を行い、固有値の減衰状況(5.76, 3.43, 1.40, 1.02, 0.96...)から、3因子性と解釈した。さらに、ある因子で負荷が.40以上、それ以外の因子で負荷が.40以下であることを基準に項目を区分し、下位尺度を構成した。

Table 2 対人認知尺度の因子分析結果
(主因子法、バリマックス回転)

	因子		共通性
1. 積極的な-消極的な	-.37	-.74	.07 .69
2. 人のわるい-人のよい	-.43	-.12	.40 .36
3. なまいきでない-なまいきな	.41	.25	-.31 .34
4. ひとつつつこい-近づきたい	-.11	-.19	.48 .28
5. にくらしい-かわいらしい	-.20	.07	.49 .29
6. 心のひろい-心のせまい	.48	.19	-.33 .38
7. 非社会的な-社会的な	-.16	.33	.41 .30
8. 責任感のある-責任感のない	.61	.08	-.08 .39
9. 軽率な-慎重な	-.68	-.23	.04 .52
10. 恥しらずの-恥ずかしがりの	-.39	-.52	.21 .48
11. 重厚な-軽薄な	.61	.07	.06 .38
12. 沈んだ-うきうきした	.30	.48	.38 .47
13. 堂々とした-卑屈な	.18	-.52	-.25 .37
14. 感じのわるい-感じのよい	-.50	.03	.64 .66
15. 分別のある-無分別な	.70	.33	-.21 .65
16. 親しみやすい-親しみにくい	.22	.13	-.69 .54
17. 無気力な-意欲的な	.14	.81	.05 .69
18. 自信のない-自信のある	.13	.80	.04 .66
19. 気長な-短気な	.19	-.05	-.10 .05
20. 不親切な-親切的な	-.57	-.02	.34 .45
固有値	3.55	3.14	2.36
寄与率(%)	17.78	15.70	11.83
累積寄与率(%)	17.78	33.49	45.32

数値はいずれも小数点下3桁以下切り捨て、太字は因子負荷絶対値.40以上。第1因子のみに高負荷を示した3, 6, 8, 9, 11, 15, 20を「社会的望ましさ」、第2因子のみに高負荷を示した1, 10, 12, 13, 17, 18を「力本性」、第3因子のみに高負荷を示した4, 5, 7, 16を「個人的親しみやすさ」の尺度項目として、それぞれ使用した。

その結果、第 1 因子では7項目が、上記の基準に該当した。これらは内容的に『社会的望ましさ』の因子と考えられたので、これら7項目を『社会的望ましさ』尺度項目と想定し、肯定的であるほど点数が高くなるように(すなわち社会的に望ましいほど高得点になるように)、必要に応じて項目得点を逆転させた上で、7項目の得点を合計して項目数で割ったものを、『社会的望ましさ』得点とした。

第 2 因子では、6項目が基準に該当した。これらは『力本性』の因子と考えられたので、社会的望ましさと同様の手続きで『力本性』得点を算出した。

第 3 因子では、4項目が基準に該当した。これらは『個人的親しみやすさ』の因子と考えられ、これも同様に『個人的親しみやすさ』得点を算出した。

以上3尺度について、評定対象ごとに信頼性係数を求めたところ、社会的望ましさは、拒絶者評定 =.76; 求愛者評定 =.63、力本性は、拒絶者評定 =.61; 求愛者評定 =.75、個人的親しみやすさは、拒絶者評定 =.54; 求愛者評定 =.70 であった。なかには信頼性係数が低いものもあるが、項目数との兼ね合いから、最低基準は満たしていると判断した。

拒絶者 / 求愛者に対する対人認知

本研究は、被験者内要因として『刺激人物の立場(拒絶者 / 求愛者の2水準)』、被験者間要因として『質問紙(男性告白・女性拒絶ストーリー / 女性告白・男性拒絶ストーリーの2水準)』と『被験者性別(男女2水準)』がある。そこで、以上の3要因を独立変数、対人認知3指標を従属変数とした、被験者間・内混合3要因の分散分析を行い、各要因が対人認知に及ぼす影響を検討した。なお、水準ごとの平均をグラフ化したものを、Figure 1 に記す。

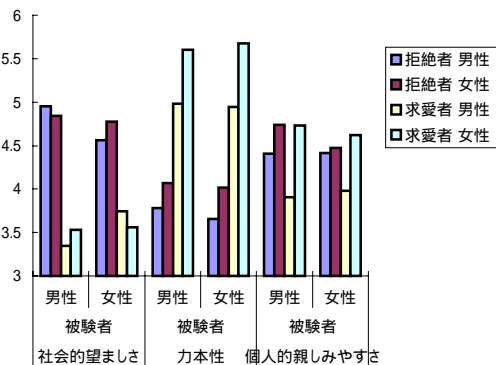


Figure 1 刺激人物の性別と立場、被験者の性別による対人認知得点

社会的望ましさ まず、社会的望ましさについては、『拒絶者の方が高評価』という立場の主効果 ($F(1,166)=249.04, p<.001$)に加えて、『男性は女性よ

りも、求愛者をより高く、拒絶者をより高く評価する』という立場と性別の交互作用 ($F(1,166)=7.90, p<.01$)、そして『男女被験者ともに、異性が告白するストーリーの刺激人物を高く評価する』という質問紙と性別の交互作用 ($F(1,166)=5.01, p<.05$)の3つの効果が見いだされた。交互作用の解釈は難しいが、少なくとも、求愛者より拒絶者の方が社会的望ましさは高いと言えよう。

力本性 次に力本性では、『求愛者の方が高評価』という立場の主効果 ($F(1,166)=394.23, p<.001$)、『女性告白ストーリーの方が評価が高い』という質問紙の主効果 ($F(1,166)=6.11, p<.05$)に加えて、『女性告白ストーリーの方が、求愛者と拒絶者の差が大きい』という立場と質問紙の交互作用 ($F(1,166)=48.57, p<.001$)の3つの効果が見いだされた。つまり、力本性評価は女性求愛者に対してもっとも高く、これは仮説に合致する結果であると考えられる。

個人的親しみやすさ さらに個人的親しみやすさでは、『拒絶者の方が高評価』という立場の主効果 ($F(1,164)=6.40, p<.05$)、『女性告白ストーリーの方が評価が高い』という質問紙の主効果 ($F(1,164)=9.20, p<.05$)に加えて、『男性求愛者は、その他の立場(女性求愛者、男性拒絶者、女性拒絶者)よりも低く評価される』という立場と質問紙の交互作用 ($F(1,164)=34.54, p<.001$)の3つの効果が見いだされた。

以上を大まかにまとめると、力本性(活動性)は求愛者の方が、社会的望ましさは拒絶者の方が高く評価され、個人的親しみやすさは男性求愛者のみ、相対的に低く評価された。よって、片思い状況に対する第三者認知は、単純に『求愛者の方が拒絶者よりも肯定的に評価される』というわけではないようである。また、多くの指標が中性点(4点)を上回っていた(Figure 1 参照)ことから、片思い状況に対する第三者認知は、一般的に肯定的であるようだ。

恋愛態度と対人認知

恋愛態度尺度 26 項目について因子分析(主因子法バリマックス回転)を行ったところ、固有値の減衰状況(5.86, 2.13, 1.66, 1.53...)から、1因子性と解釈した。そこで、項目尺度相関が.30以下の項目を除外し、残った 19 項目を、恋愛至上主義尺度項目として採用し、合計を除外した値を恋愛至上主義得点とした ($M=2.74, SD=.61, \alpha=.85$)。

次に、先述の3要因計画に、恋愛至上主義得点を共変量として投入した分散分析を行った。その結果、力本性と個人的親しみやすさを従属変数とした分析では、恋愛至上主義の主効果と交互作用は、いずれも有意ではなかった。しかし、社会的望ましさに従属変数とした分析のみ、恋愛至上主義の主効果 ($F(1,162)=3.16,$

$p < .10$),そして恋愛至上主義と立場の交互作用 ($F(1,162)=3.07, p < .10$)が有意傾向であった。そこで、恋愛至上主義と、求愛者/拒絶者に対する社会的望ましさを求めたところ、拒絶者の社会的望ましさと恋愛至上主義は無関連 ($r=.02, ns$)であったが、求愛者の社会的望ましさと恋愛至上主義の間には、有意な正の相関 ($r=.22, p < .01$)が見いだされた。よって、恋愛至上主義が高いと、求愛者の社会的望ましさを高く評価することが確認されたが、それ以外の対人認知と恋愛至上主義は無関連であり、「恋愛至上主義は求愛者に対する高評価を、拒絶者に対する低評価をもたらす」という仮説は、概ね支持されなかった。

片思い状況への親近性による対人認知

さらに、刺激文で示されたような片思い状況の経験の有無、すなわち片思い状況への親近性と、対人認知の関連を検討した。まず、求愛者/拒絶者の立場を、間接的/直接的に経験したことがあるか、という質問に関する回答結果を、Table 3に示す。

Table 3 片思い状況の経験頻度

	ない	ある
間接拒絶経験 (刺激文の拒絶者と似たような立場の経験談を聞いたことがあるか)	109名(64.1%) M=54 F=55	61名(35.9%) M=29 F=32
間接求愛経験 (同じく求愛者と似たような立場の経験談を聞いたことがあるか)	108名(63.5%) M=49 F=59	62名(36.5%) M=34 F=28
直接拒絶経験 (自分が拒絶者と似たような立場を経験したことがあるか)	113名(66.5%) M=53 F=60	57名(33.5%) M=30 F=27
直接求愛経験 (自分が求愛者と似たような立場を経験したことがあるか)	145名(85.3%) M=63 F=82	25名(14.7%) M=20 F=5

M:男性人数 F:女性人数

これらの経験が対人認知に及ぼす影響を検討するにあたっては、本来は間接経験と直接経験、拒絶者と求愛者の立場の違いを考慮し、これら4変数を独立に扱うべきであろう。しかし、それだけでも独立変数が4要因となり、かつ被験者や刺激人物の性別まで考慮すると、その分析は極めて煩雑となる。また、親近性4変数は必ずしも独立ではなく、間接拒絶経験と直接拒絶経験は $r=.30 (p < .001)$ 、間接求愛経験と直接求愛経験は (直接経験者が少ないにもかかわらず) $r=.20 (p < .01)$ である。これは自己開示の返報性などによるのであろうが、間接経験と直接経験を包括しても、問題は小さいと考えられる。

そこで本研究では便宜的に、まず経験の間接性/直接性を包括して、親近性指標を2つに統合した。すなわち、間接/直接いずれかで拒絶経験がある場合、それを拒絶経験有群と見なし、どちらもない場合を拒絶経験無群とした。求愛経験も同様に群分けを行った。さらに、本来は最初に実施した3要因(刺激人物の立場、質問紙、被験者の性別)に、親近性2要因を加えた計5要因で検討すべきであるが、それもまた分析が非常に煩雑になる。そして、この分析の目的は「片思い状況への親近性が、求愛者/拒絶者評価に及ぼす影響の検討」なので、刺激人物と被験者の性別は特に考慮せず、被験者内要因である刺激人物の立場、そして被験者間要因として上記の親近性指標2要因を独立変数とした、3要因分散分析を行った。

その結果、まず社会的望ましさについては、立場の主効果 ($F(1,166)=202.11, p < .001$)のみが示され、親近性指標は主効果、交互作用ともに有意でなかった。次に力本性では、立場の主効果 ($F(1,166)=266.60, p < .001$)に加えて、拒絶経験の主効果 ($F(1,166)=2.79, p < .10$)が有意傾向であった。ただし、その差は実質的にあまり大きくないようだ(拒絶経験なし $M=4.56$ 、拒絶経験あり $M=4.67$)。さらに個人的親しみやすさでは、立場の主効果 ($F(1,164)=8.26, p < .01$)に加えて、拒絶経験の主効果 ($F(1,164)=5.91, p < .05$)が有意であり、求愛経験の主効果 ($F(1,164)=3.55, p < .10$)と、立場×求愛経験×拒絶経験の交互作用 ($F(1,164)=3.61, p < .10$)が有意傾向であった。すなわち、拒絶/求愛どちらの立場も経験している人は、拒絶者/求愛者の両者に対して個人的親しみやすさを高く評価しており、一方、求愛経験はあるが拒絶経験がない人は、拒絶者を高く、求愛者を低く評価していた (Figure 2)。

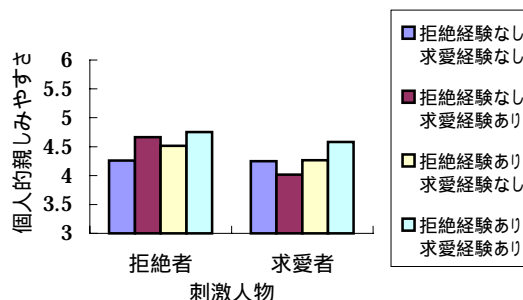


Figure 2 刺激人物の立場、被験者の拒絶/求愛経験による個人的親しみやすさ

以上の結果から、社会的望ましさと力本性については、状況への親近性指標はあまり関連しないが、個人的親しみやすさについてのみ、状況への親近性が影響すると考えられる。特に、求愛経験しかない人の評定が自虐的であること、そして求愛/拒絶両方の経験をしている

人の評定が、求愛者/拒絶者両者に対して、他の群より肯定的なのは興味深い。

考察

本研究は、(1)片思い状況の拒絶者と求愛者に対して、第三者認知に違いがあるか、(2)それらの認知に及ぼす、恋愛態度と状況親近性の影響、を検討した。

求愛者/拒絶者に対する第三者認知の差異

まず、拒絶者と求愛者に対する認知の違いについては、全般的に、拒絶者は求愛者よりも「社会的望ましさ」の、求愛者は拒絶者よりも「力本性」の、評価が高いことが見いだされた。したがって、「拒絶者の方が求愛者よりも否定的に評価される」という仮説は、力本性についてしか支持されなかった。求愛者の力本性、すなわち積極性が高く評価されるのは、直感的にも妥当な結果であるが、なぜ拒絶者の方が、社会的望ましさについて高い評価を得るのだろうか。その理由としては、「片思い状況は高望み状況で生じやすい」(Bratslavsky et al.,1998)という、経験則に則った解釈が考えられよう。すなわち、社会的に望ましい特質を備えている人だからこそ、他者から求愛され、かつそれを拒絶することができる、という解釈である。ただし、この解釈は推測の域を出ないものであり、その妥当性については検討が必要である。

また、その他の立場と比して、男性求愛者のみ「個人的親しみやすさ」の評価が低かったことも興味深い。これまで述べたように、拒絶者は男女とも高望みの対象として、そして女性求愛者は性役割観にとらわれない積極的な存在として、肯定的評価が生じうる。しかし、男性が求愛することは、性役割的にはわりと普通のことであり、そのこと自体で何らかの評価が上がることは、あまりないだろう。さらに、本研究で提示された物語は、拒絶後も相手を追いかける、いわば諦めの悪い物語であり、それが「男らしくない」「ストーカー的だ」というような、否定的印象をもたらしたのではないだろうか。

対人認知の規定因

次に、片思い状況における第三者認知の規定因として、本研究では、恋愛態度としての恋愛至上主義と、片思い状況への親近性の影響を検討した。

1) **恋愛至上主義** 「恋愛を肯定視する人ほど、求愛者を肯定的に、拒絶者を否定的に認知するであろう」という仮説を検証するため、本研究では恋愛至上主義尺度を構成し、対人認知との関連を検討した。しかし、恋愛至上主義と求愛者の社会的望ましさの間に正の関連が確認された他には、恋愛至上主義と対人認知の関連は見いだされず、仮説は概ね支持されなかった。

ただし、今回の結果のみで、「恋愛態度と片思い状

況の対人認知は関連しない」と結論づけるのは性急であろう。なぜなら、今回用いた尺度は、継続性が仮定される恋愛、すなわち形成された恋愛関係の想定に基づいていると考えられる項目が多く、恋愛の継続性が仮定されない本研究において用いるのは、不適切であったとも考えられるからである。よって、今後の研究では、恋愛関係形成期に影響を及ぼしそうな恋愛態度関連要因 - たとえば、恋愛の色彩理論(Lee, 1973)におけるルダスやエロス、リメランス(のぼせ上がり)傾向(Tennov, 1979)、ソシオセクシュアリティ(casual sex への志向性:Simpson & Gangestad, 1991)など - を用いた検討も考えられよう。

2) **片思い状況への親近性** 片思い状況への親近性、すなわち間接的/直接的な拒絶/求愛経験の有無と、対人認知の関連を検討した分析では、社会的望ましさと力本性に対する状況親近性の影響はあまり見られなかった。しかし、個人的親しみやすさについては、(1)求愛経験はあるが拒絶経験のない人は、拒絶者を高く、求愛者を低く評価する;(2)拒絶/求愛どちらの経験もある人は、拒絶者/求愛者両方を他の群よりも高く評価する、という交互作用傾向が見いだされた。この理由として、まず(1)の場合は、拒絶された苦い経験があり、かつ拒絶した経験がないので、拒絶者に対しては自身のネガティブな経験を反映した自虐的ネガティブ評価が、一方、求愛者に対しては「高嶺の花」のようなイメージしきれないのでポジティブ評価が、それぞれもたらされたのかも知れない。それに対して(2)のケースは、どちらの立場も苦しいという心情がリアルに理解できるので、「どちらも悪くはないんだ」という印象が生じ、肯定的評価がもたらされるのではないだろうか。

しかし、これも推論に留まる解釈であり、その妥当性は定かでない。また、なぜ「個人的親しみやすさ」のみで、そのような結果が得られたのか、という疑問にも、この解釈では十分に答えられない。そもそも、この結果は有意傾向に留まるものであり、解釈には慎重を期すべきである。しかし、「両側面の経験をすることによって、両者を肯定的に評価するようになる」という結果は、恋愛経験を重ねることが、非一方的かつ肯定的な恋愛観の形成に寄与する可能性を示唆しているとも考えられ、興味深いものである。

今後の課題

さて、本研究のその他の問題点と今後の課題について、若干触れておきたい。

本研究は「求愛者/拒絶者の比較」という目的上、便宜的に1被験者から2被験者分のデータを得られたと仮定して対人認知尺度を構成した。しかし、そこで構成した尺度には信頼性係数が低いものもあり、これは改善

すべき問題であろう。

また、今回は第三者としての評定だったが、当事者としての場合についても検討することが望まれる。さらに、今回の刺激文では両者の内面的感情まで描写したが、それが片方みの描写であったり、もしくは両方とも感情描写を除去することによって、対人認知が変化する可能性もある。加えて、今回用いた「典型的な片思いの物語」が、実際に典型的なものなのか、確認すべきであろう。

さらに、今回は典型的な片思い状況について扱ったが、告白が上手くいった場合(そしてそれが続いた場合、その後破局した場合)、やむを得ずつきあった場合(そしてそれが続いた場合、結局は破局した場合)など、対照群となりうるような、さまざまな状況についても検討しなければ、片思い状況の特殊性は明確化できないであろう。加えて、先に述べたように、片思いはセクシャル・ハラスメントやストーキングなどの問題とも、重複するところがあると思われる。それらと通常の片思いの、関連や弁別性の検討も、今後の重要な課題である。

結語

ちなみに本研究の被験者が、過去5年間に恋愛感情を抱いた相手の数は、平均3.15人であり、全体の90%(153名)は恋愛感情を持ったことがあった。また、過去5年間に自分に対して恋愛感情を持ったであろう相手の数は平均2.86人、全体の78.8%(134名)は恋愛感情を持たれたことがあった。しかし、実際に過去5年間で交際した相手の人数は、平均0.98人、過去5年間に交際経験があるのは86名(50.6%)に過ぎなかった。このように、恋愛感情はかなり普遍的に存在するにもかかわらず、実際に恋愛関係を形成するのは容易ではない。ただし、「現在の恋人の有無」と「過去の恋人の有無」の関連は、 $r = .14$ と小さく、「恋愛感情は誰にでもあるけど、恋愛ができるのは一部のモテる人だけ。モテる人はいつでもモテるし、モテない人はいつもモテない」というわけでもなさそう。それでは、なぜ、恋愛感情は多くの人にあるのに、恋愛関係に至る人は少ないのだろうか。それはやはり、感情があってもその成就には壁がある、つまり求愛のリスクが大きいので恋愛関係形成に至らない、という部分が大きいのではないだろうか。今回のデータで、状況親近性4指標はいずれも経験率40%以下(Table 3 参照)であり、特に直接求愛経験者は25名(全体の14.7%、男性の23%、女性の6%)に過ぎない。また、「現在、特定の異性の恋人がおらず、かつ交際したいと思う特定の異性がいる」と回答した被験者は42名いたが、うち「告白した/するつもり」と回

答したのは14名に過ぎない。なかには横恋慕で告白できないケースもあるが、どうやら告白はかなり高いハードルのようである。もちろん、それが成功したときの喜びは大きい。しかし、そのリスクも大きい。肯定的であれ否定的であれ、恋愛が個人にもたらす影響は強大である。そして、リスクに躊躇せずに恋愛するために、恋愛は社会において多少過度に思えるほどに、肯定視されるのかも知れない。

本研究は、恋愛を肯定視する風潮が、拒絶者に対する否定的評価をもたらすのではないか、という観点を含んで、片思い状況における対人認知、ならびにその規定因を検討した。しかし、拒絶者は全面的に否定的評価を受けるわけではなく、片思いという苦しい状況の当事者となることによって、同じ状況に直面した他者を肯定的に見ることも促されるようだ。常識の範囲内であれば、やはり恋愛は推奨されるべきものなのであろう。ただし、やはり「片思い」という状況は複雑で、まだまだ少なからず検討の余地があるテーマのようだ。今回の調査の感想に、「ここで提示された刺激文くらい、頑張っただけで追いつけないとダメですね」という趣旨の記述と、「ここで提示された刺激文って、スゴいことですね」という趣旨の記述の両方あったことが、そのことを暗示している。

引用文献

- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-539.
- Baumeister, R. F., Wotman, S. R., & Stillwell, A. M. 1993 Unrequited love: On heartbreak, anger, guilt, scriptlessness, and humiliation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 377-394.
- Berscheid, E. & Campbell, B. 1981 The changing longevity of heterosexual close relationships. In M. J. Lerner & S. C. Lerner (Eds.), *Justice Motive in Social Behavior*. (pp.209-234). New York: Plenum.
- Bratslavsky, E., Baumeister, R. F., & Sommer, K. L. 1998 To love or be loved in vain: The trials and tribulations of unrequited love. In B. H. Spitzberg & W. R. Cupach (eds.) *The Dark Side of Close Relationships*. (pp.307-326). New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現 - コミュニケーションに見る発展と崩壊 - 心理学評論, 33, 322-352.
- 林 文俊 1976 対人認知構造における個人差の測定(1) - 認知的複雑性の測度についての予備的検討 - 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学), 23, 27-38.
- 飛田 操 1989 親密な対人関係の崩壊過程に関する研究 福島大学教育学部論集, 46, 47-55

Hill, C. T., Rubin, Z., & Peplau, L. A. 1976 Breakups before marriage: The end of 103 affairs. *Journal of Social Issues*, 32, 147-168.

堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.

栗林克匡 2000 恋愛における告白時の状況に関する研究 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集, 396-397.

Lee, J. A. 1973 *The Colors of Love: An Exploration of the Ways of Loving*. Don Mills, Ontario: New Press.

松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.

宮下一博・臼井永和・内藤みゆき 1991 失恋経験が青年に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要第1部, 39, 117-126.

下斗米 淳 1996 「対人関係の親密化」研究の展望:理論的枠組みの検討 専修人文論集, 58, 23-49.

Simpson, J. A. & Gangestad, S. W. 1991 Individual differences in sociosexuality: Evidence for

convergent and discriminant validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 870-883.

Sprecher, S. 1994 Two sides to the breakup of dating relationships. *Personal Relationships*, 1, 199-222.

菅原健介 2000 恋愛における「告白」行動の抑制と促進に関わる要因 - 異性不安の心理的メカニズムに関する一考察 - 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集, 230-231.

Tennov, D. 1979 *Love and Limerence: The Experience of Being in Love*. New York: Stein & Day.

和田 実 1994 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究, 34, 153-163.

註

1)本研究の一部は、日本社会心理学会第 42 回大会において報告された。

資料1 本研究で用いられた刺激文(パターンA:男性求愛者、女性拒絶者の場合)

トモミ(女)とタカシ(男)は大学の友人だった。彼らは同じ専攻だったので多くの時間を一緒に過ごし、それにつれて仲良くなった。しばらくたってから、タカシはトモミに対する自分の気持ちが変わったことに気づいた。彼は彼女に魅力を感じるようになり、彼女を想う気持ちは強くなっていった。最初、タカシは沈黙を守っていたが、いつの間にか、彼の彼女に対する欲望は抑えがたいものとなり、しばらく自分の気持ちに悩んだ末、タカシはついにトモミへの愛を告白した。トモミは驚き、タカシの愛を嬉しく思ったが、彼の気持ちに伝えることはできないだろうとも思った。それでも、トモミはタカシに気を使い、彼を傷つけることを気にして、優しく断ろうとした。彼女は、「あなたは(君は)すごくいい人だと思うし、一緒にいるのは楽しいけれど、友達のままでもいいの(いたいんだ)。」と言った。

タカシはがっかりしたが、あきらめようとしなかった。タカシは、自分とトモミには何か特別なものがあり、もし自分が求愛し続ければ、彼女も振り向いてくれるだろうと思った。タカシはトモミを追いかけ続け、彼女と付き合いたいという気持ちを、手紙や贈り物で示した。トモミは非常に困惑するようになった。彼女はタカシを傷つけたことへの罪悪感を感じていたが、それと同時に、次から次への求愛に、いらいらも感じた。彼女にとって、もはや彼の愛は嬉しいものではなく、この状況が終わらないことに絶望を感じた。そこで、「もうかまわないで欲しい」というメッセージをタカシが理解するように、トモミは物理的にも精神的にも、タカシに近づかないようにした。

トモミの計画は逆効果だった。彼女がタカシを遠ざけたことは、彼女の愛を得るための彼の努力に、さらに火を付けた。ついに、進退窮まって、トモミはタカシに会って、はっきりとわかるように、彼女は彼を愛していないし、二度と会いたくないと告げた。タカシは非常にショックを受けたが、とうとう彼女への愛をあきらめた。あとから振り返って、タカシは、「彼女の拒否はショックだったけど、やっぱり彼女のことは好きだ(好き)」と言った。一方トモミは、自分の気持ちを分かってくれない人と、どうやったら友達で居続けることができるのか分からなくなった。トモミはタカシを傷つけたことへの罪悪感を感じたが、彼が友情を壊したことへの怒りも感じていた。そして、こんなことが二度と起こらないことを願った。

パターンB(女性求愛者/男性拒絶者)の場合は、「トモミ」と「タカシ」、「彼女」と「彼」を、それぞれ入れ替えた。また、それに伴って表現が不自然にならないように、下線部を()の表記に変更した。

Person perception by the third person toward would-be lovers and rejectors in unrequited love: Using a fictional scenario procedure.

Takeshi HASHIMOTO (*Faculty of Humanities and Sciences, Shizuoka University*)

This study examined the third person's person perception toward would-be lovers and rejectors in unrequited love, and relationships between person perception, romanticism, and experiences of unrequited love. In a questionnaire, each subject read a fictional scenario describing an unrequited love story, and then completed measures of person perception (intellectual evaluation: IE, dynamicism: DY, social evaluation: SE) toward stimulus persons (SPs: would-be lovers and rejectors), their own romantic love attitude, and their own experiences of romantic love. One-hundred seventy undergraduates (83 males, 87 females, mean age 19.71) completed the questionnaire. Analyses showed following results that; (1)Would-be lovers were evaluated DY higher, although IE lower than rejectors. SE of male would-be lover were evaluated lower than other SPs. (2)Subjects' romanticism were correlated positively with only would-be lovers' IE.(3)Subjects who experienced both situations rated both SPs' SE higher than other subjects. On the other hand, subjects who experienced only would-be lover situation rated rejectors' SE higher, would-be lovers' SE lower.

Keywords : unrequited love, would-be lovers, rejectors, person perception, romanticism.